



『真しんに恨うらみ心ごころはいかなる術すべをもつても、恨いみを懐いだくその日ひまで人の世よには止やみがたし。

恨こみなきによつてのみ、恨しんりみはついに消ゆるべし。此こはかわらざる真しんり理りなり』

これは法句經に説かれたお釈迦さまのお言葉です。当たり前のことのように、言い換えれば恨みを「消す」ことがいかに困難であるかという事実を再認させられる経説でもあります。

新聞を広げてみればわかるように、殺傷事件から国家同士の紛争まで…、恨みによって人を傷つける事例は時代を問わず枚挙に暇がありません。それこそ事件にはならなくとも、「あいつは気に食わない」と疎ましく感じたり、「ふざけるな！」と口論になってしまうことはだれしも経験があることでしょう。しかし、私たちは多くの方々と関わり合いを持ち、過ごしてゆかねばなりません。人との関わり合いは他の価値観を学ぶとともに自己の考え方を広げ、人間性を豊かにしてくれる存在であるはずですが、時と場合によっては不安や憎しみの対象、そして諍いを生み出す原因ともなります。人はこの二律背反の条理を背負って生きてゆかねばならぬ存在なのかも知れません。恨みからは恨みを、憎しみからは憎しみしか産み出さないと理屈ではわかっている、恨まずにはいられないという人の性（さが）があります。しかし、この感情にすべてを任せてしまえば、相手も自分も永久に苦しみ続けなければなりませんし、互いに壊れゆくことでしょう。憎しみは人である限り、生起する自然な感情ではあります。でも辛くとも忍び、耐え、そこから学びに転じ、智慧によって乗り越えてゆくことができるのもまた人ですし、そこからしか安息は生まれぬのも事実です、互いの安息が…。

「ピストルと闘うために 花があるんだよ・・・。」



新聞やテレビ、ネットなどで多くの感銘と気付き、そして深い反省をもたらしたひとコマがありました。TVジャーナリストがフランステロ事件の犠牲者追悼が行われた広場を訪れていた父子へのインタビューをご紹介します。

- ・ジャーナリスト「どうしてこんなことが起きたのかわかる？」
- ・子「すごく、すごく意地悪な人たちがしたんだ。」
「意地悪な人たちには、思いやりがないんだ。意地悪な人たちはね。だから気をつけないと。家も移らなくちゃいけない。」
- ・父「家は変わらないよ。怖がらなくても大丈夫。フランスは、これからも僕らの家だよ。」
- ・子「でもパパ、意地悪な人たちがいるんだよ。」
- ・父「そうだね。でも意地悪な人たちはどこにでもいる。どこにでもね。」
- ・子「ピストルを持っていて、すごく意地悪だから、僕たちを撃つかも说不定だよ。」
- ・父「むこうがピストルを持っていても、こっちには花があるさ。」
- ・子「でも花は何の役にも立たないよ。花は・・・。」
- ・父「よく見てごらん、みんな花を置いているだろ。あれはピストルと闘うためなんだ。」
- ・子「みんなを守るために？」
- ・父「そうだよ」
- ・子「ろうソクもそうなの？」
- ・父「ろうソクは、いなくなった人たちを忘れないためのものなんだ。」

男の子はお父さんの言葉をじっと噛みしめた後、とても安らかな表情になって言いました。

- ・子「花とろうソクは、僕たちみんなを守るものなんだね。」

最後にジャーナリストが「安心した？」と尋ねると、「うん、安心した。」と答えたのです。